

J.S.S.W NEWS

日本ソーシャルワーク学会通信

2026年3月31日

【発行責任者】 小山 隆

【編集責任者】 小野セレスタ摩耶

No.144

Contents

I. 巻頭言「実践家が活用すべき有効な「実践研究方法」の探索」大島 巖	1
II. 「ソーシャルワーク・コラボセミナー 2025 in 愛知」報告	3
III. 2025年度第3回理事会（2025年11月30日開催）報告	6
IV. 2025年度第4回理事会（2026年1月11日開催）報告	11
V. 2025年度第5回理事会（2026年3月8日開催）報告	16
VI. 日本ソーシャルワーク学会2026年度「第43回大会」 （7月11日・12日）のお知らせ	21
VII. 新入会員の声	24
編集後記	小野セレスタ摩耶 27

I. 巻頭言

実践家が活用すべき有効な「実践研究方法」の探索

東北福祉大学 大島 巖

(教授/学会副会長/研究推進第3委員会)

「実践研究」は、「実践に基づいた専門職」であるソーシャルワーカーにとって、研究を進めて行く上で不可欠な研究分野であることは言うまでもない。

しかし、ソーシャルワーク領域の「実践研究」の方法とは、具体的にどのようなものなのか、目的や研究方法論的な特徴、対象とするフィールド（自職場・自実践か否か）など、必ずしも明確にされていないように思われる。グローバル定義にもあるように、「社会変革と社会開発」などマクロレベルの実践もが射程に入ると考えると、「実践研究」の対象範囲は他専門分野に比べて大きく広がる可能性がある。

私にとっての、ソーシャルワーク領域の「実践研究」は、福祉系大学の教員になって以来、特に実践家を対象とした大学院教育や学会活動などでは常に最重要課題として直面し、中でも大学院教育では、院生が優れた研究をまとめて論文化する上で不可欠なテーマであった。

また実践家を対象にした入試広報を行う時には、常にそれをどのように社会に対して情報発信するのか、心を砕いて来た。「いま取り組む社会課題・福祉課題の解決に具体的に貢献」「《実践力および実践研究力》を身につけて、社会で活躍する人材育成を旨とする」「実践力と実践研究力は一体のもの」などである。その際、平山尚先生らの著書（2003：55）から、「社会福祉実証研究の流れは、ソーシャルワーク実践の流れと非常に似通っている」を繰り返し引用させて頂いて来た。特に自職場・自実践改善のPDCAには、実践研究力が問われていることを、繰り返し説明している。

これらのことについては、2023年の学会研究大会、さらには2015年の大会でも課題として位置づけるなど、繰り返し学会でも取り上げて来た。特に、私が委員長を務める研究推進第3委員会の中心的活動の1つである「実践研究支援ワークショップ」では明確な位置づけが必要になる。

このたび、私が東北福祉大学を2026年3月末に定年退職するに当たって、最終講義において「実践研究」を取り上げて、「実践家が活用すべき有効な《実践研究方法》の探索」と「大学院教育への期待」をテーマに、最終講義を行った。この最終講義を行うに当たって、改めてこのテーマを深く考える機会を得た。その

中で、教育サイドからこのテーマに取り組む際に重視しなければならない視点として、研究の対象は「実践活動＝支援や介入、実施するプログラムやサービス」であること、実践の担い手が実践研究の担い手になること（実践レベルでは実践家が「実践研究」を主導すること）、実践研究の原点は、自らの実践を省察し、自職場・自実践、さらには特定領域の課題を明らかにすること、明らかになった特定領域の課題に対する対応策・改善策のための計画立案、対応策・改善策に関する介入実践を実施し、その結果・成果について分析・考察を行って社会に発信することが重要であること。プログラム評価（プログラム開発と評価）の方法が有効であり、その方法は「自職場・自実践」を対象としたケーススタディ（Yin=2011）においても十分に活用できること、などであった。

改めて整理すると、「実践研究」の中心的担い手が実践家であること、自職場・自実践の研究に対するケース・スタディに焦点を当てること、その際、実践の介入や支援に対する研究を行う上でプログラム評価（プログラム開発と評価）の方法論が力を発揮しうることなどについて、今後、皆さまと共に十分に議論をしていきたいと考えている。

【文献】

- ・平山尚ほか（2003）. ソーシャルワーカーのための社会福祉調査法. ミネルヴァ書房
- ・Yin RK (=2011). ケース・スタディの方法（第2版）. 千倉書房

Ⅱ. 「ソーシャルワーク・コラボセミナー 2025 in 愛知」 報告

日時：2026年2月23日（月・祝）13:20～16:30（対面とオンラインとのハイブリッド開催）

対面会場：日本福祉大学東海キャンパス（〒477-0031 愛知県東海市大田町下浜田 1071 番地）

テーマ：「子どもたちの未来を地域で支える包括的支援—SSW と CSW の協働の可能性—」

日本福祉大学 川島 ゆり子
(学会理事・研究推進第3委員会)

連休日の最終日にあたる2月23日（月・祝）、「子どもたちの未来を地域で支える包括的支援 —SSW と CSW の協働の可能性—」をテーマに、日本ソーシャルワーク学会とあいち SSW 実践研究会、これからのちいき共生社会研究会、愛知県社会福祉協議会の共同開催で、ソーシャルワークコラボ in 愛知が実施された。

職能団体など法人格をもつ団体との共催が多かった本学会のいままでのコラボ企画とは違い、実践者同士が実践の向上を目指し、自主的に組織化し学びを継続してきた実践者主体の任意組織である2団体と共催できたことは画期的なことだったと思う。

「子どもたちの未来を地域で支える包括的支援」というタイトルで、本学会奥村賢一会員に基調講演をお願いした。まだSSWがほとんど認知されていないような状況から、一つひとつ壁を乗り越えていきSSWを推進してこられたプロセスが語られ、また子どもたちを支えるためには地域との連携が不可欠ということが示された。続く実践報告では、SSWとCSWがともに協働することによって包括的な支援を展開した事例が紹介され、その支援に関わるSSW・CSWがそれぞれの立場からの事例への関わりが報告された。一つの事例を軸に双方の視点やアプローチの違い、協働の意義が見える化されていくプロセスは非常に興味深く、参加者の心が引き込まれるような報告だった。

実践報告をうけ、それぞれの研究の立場から野尻紀恵会員（SSW研究）、加藤昭宏会員（CSW研究）にコメントいただいた後、パネルディスカッションではSSW・CSWそれぞれの研究者実践者6名により、「地域と学校の間にある壁とはいったい何か」「学校と地域がつながるために、SSW・CSWはどのような媒介機能を果たしているのか」「ソーシャルワークの協働により、学校、地域にはどのような変化が期待できるのか」について闊達な議論が展開された。「子どもたちの未来はソーシャルワーカーにとっての未来でもある」ということが共有され、このコラボを契機にさらに、双方の実践者・研究者による実践研究が進むことを期待したい。

<プログラム>

13:20 開会挨拶 小山 隆 氏（日本ソーシャルワーク学会会長 / 同志社大学）

13:30～14:20 基調講演「子どもたちの未来を地域で支える包括的支援」

奥村 賢一 氏（福岡県立大学）

14:20～16:20 シンポジウム

【実践報告】「ケースを通して考える協働実践の意義」

・沖田 昌紀 氏（一宮市教育委員会 SSW）

・菱川 将希 氏（一宮市社会福祉協議会 CSW）

【コメント】

・野尻 紀恵 氏（日本福祉大学）～SSW 研究の立場から～

・加藤 昭宏 氏（同朋大学）～CSW 研究の立場から～

【実践報告をうけてのディスカッション】

16：20～16：30 閉会挨拶

主催：日本ソーシャルワーク学会

共催：共催：愛知県社会福祉協議会、あいちSSW実践研究会、これからのちいき共生社会研究会

ソーシャルワーク・コラボセミナー in 愛知

子どもたちの未来を地域で支える包括的支援 —SSW と CSW の協働の可能性—に参加して

常滑市スクールソーシャルワーカー 仮屋 太洋

学校には、従来の縦割り施策では解決が困難な子どもの権利を脅かすさまざまな課題が生じている。それらに抗する可能性が期待される手段として、包括的支援体制の構築が進められ、全世代の暮らしを地域で支える支援が目指されている。その中で、今回のテーマであるSSWとCSWの協働は必要不可欠であり、そうしなければ子どもたちの生活を支えることはさらに困難となる。

基調講演では、奥村先生が歩んだ福岡県でのSSWの流れの前史として、問題を抱える子ども等の自立支援事業やSSW活用事業等について、過去から現在、そして未来の展開を歴史の変遷の視点から、その実践が紹介された。そして、政策動向や実践における支援システム、SSWの役割と状況について、日本のSSW元年から現在までの変遷、学校をプラットフォームにした取り組み等、学校現場や地域で子どもを育むあらゆる工夫があった。とりわけ地域連携においては、言葉の選択や意義の示し方等の意図的な仕掛けがあり、地域との協働を実現させた職員会議での言葉の選択、教員に響かせる言い換えの技術等の豊富な知見を得られた。

沖田氏と菱川氏の協働事例の報告では、関係機関を紹介することにとどまらないSSWとCSWの実践が報告された。それぞれが単独で働きかけるのではなく、事前に両者が各機関の役割や出来ることを丁寧に共有し、継続的に協働していく体制の構築、学校と地域、そして家庭のチーム化を図っていた。一方、構築した支援システムを維持し続ける点においては、人の入れ替わりも考慮した体制づくりに課題が残り、SSWとCSWのさらなる学び合いの推進が必要であることが示唆された。

SSW・CSW研究の立場として、野尻先生・加藤先生からそれぞれコメントをうけ、川島先生とのやりとりによるディスカッションを行った。中でも、我々の責務の1つである社会開発のセッションが印象的であった。SSWとCSWの協働は、見通しが持てなかった支援の灯火となり、子どもたちの未来を地域で支える包括的支援へと発展していた。これらのシンポジウムに参加させていただき、ないものをつくる協働の可能性を再確認し、実践と研究の両輪が私の中で地に着いた。このような機会への参加に感謝し、シンポジストとしての登壇がいかにかに幸福なことだったのかを振り返った。

ソーシャルワーク・コラボセミナー in 愛知

子どもたちの未来を地域で支える包括的支援 —SSW と CSW の協働の可能性—に参加して

刈谷市社会福祉協議会 北浦 稔

今回の企画に参加して一番感じたのは「理想と現実の差がまだまだ大きいな」という点である。今回、実践報告をいただいた一宮市 SSW の沖田氏、CSW の菱川氏の取り組みは、お二人の中では試行錯誤や苦勞があると思うが、SSW と CSW が連携協力していく姿として素晴らしいものを感じた。ただ現実的には配置状況を考えても SSW の方が多く、CSW の方が少ないと思われる。SSW が CSW と連携したいと考えた時に需要と供給のバランスがあってないのではないかと感じた。

基調講演の奥村先生の「地域には地域のソーシャルワーカーが絶対にいる。スクールソーシャルワーカーは学校内のことをしっかり取り組む」、ディスカッションの中で日本福祉大学の野尻先生の「学校内の壁を破壊する」とあるようにそれぞれ専門職がそれぞれ頑張らなくてはいけないことがあるのではないかと感じた。

また、双方が連携していく中で大事になると感じたのは、それぞれの立場で考えることである。愛知県社会福祉協議会 CSW の養成研修で日本福祉大学の川島先生が伝えてくれる内容であるが、「メガネをかけかえる」ことができるか。支援者同士もお互いのメガネを時につけかえる必要があるのではないか。そのためにはまず、そのメガネを持っている必要がある。すなわち相手のことを知る必要があると思った。支援の中で専門分野に基づき、役割を分けることも多いと思うが、そうすると専門職自体が協働していても支援の隙間ができてしまう可能性もある。お互いがそれぞれのメガネを入れ替えたり、時に当事者のメガネ、地域のメガネと入れ替えることで支援の幅は広がっていくと感じた。そうした中で講義の中で同朋大学の加藤先生は「のりしろ」が出てくると思う。

Ⅲ. 「2025年度第3回理事会」報告

○日時：2025年11月30日（日）17時30分～19時21分 WEB会議（ZOOM）会議

○出席・欠席者一覧

役職	氏名	所属	出欠
会長	小山 隆	同志社大学	出
副会長	空閑 浩人	同志社大学	出
	和気 純子	東京都立大学	出
	大島 巖	東北福祉大学	出
	保正 友子	日本福祉大学	出
理事	久保 美紀	明治学院大学	委任状
	岡田 まり	立命館大学	出
	木村 容子	日本社会事業大学	出
	川島 ゆり子	日本福祉大学	出
	荒井 浩道	駒澤大学	出
	大谷 京子	日本福祉大学	出
	白川 充	仙台白百合女子大学	出
	横山 登志子	札幌学院大学	出
	ヴァイラーク・ヴィクトル	日本社会事業大学	出
	志水 幸	北海道医療大学	出
	池田 雅子	北星学園大学	出
	渡辺 裕一	武蔵野大学	出
	佐藤 俊一	NPO 法人スピリチュアルケア研究会ちば	出
監事	福山 和女	ルーテル学院大学	出
	黒木 保博	長野大学	出
庶務	小野セレストア摩耶	同志社大学	出

I. 各委員会からの活動報告

○研究推進第一委員会

1. 学会誌編集委員会

スムーズにいき、予定通り刊行できる。掲載2本というのはやや厳しいが、質と量の論文がそれぞれあってよいものになった。

●学会誌51号（2025年12月刊行予定）編集進捗状況について

- ・投稿論文6本（投稿種別：論文6本）→掲載可2本，掲載不可4本
- ・グッドプラクティショナー（GP）→1本，横田千代子氏（女性自立支援施設いずみ寮施設長）（推薦者：久保美紀）
- ・書評→大嶋栄子（2024）『傷はそこにある－交差する逆境・横断するケア』日本評論社（評者：空閑浩人）

2. 学会賞選考委員会

実践には役に立つだろうという点で決定したが、学術書なのかどうかというのが議論となり、要綱の一部改正について議論してきた。改正条項（案）について説明、提案。

- 「日本ソーシャルワーク学会 学会賞事業要綱」の一部改正について（提案）（以下を参照）
- 2026年度の選考にむけて、会員からの推薦受付を開始する（2026年1月31日締切）。メールマガジン・学会ホームページ等で案内する。

3. 研究奨励委員会

● 2025年度の会員研究奨励費については、1件の申請を採択した（7月の総会で報告済）。

* 岸本尚大氏（会員番号 0995）（東京都立大学大学院人文科学研究科社会福祉学分野博士後期課程・名古屋市社会福祉協議会）

研究テーマ 「地域を基盤とした外国人支援のソーシャルワーク実践プロセスに関する質的研究
—文化的コンピテンスに基づく支援と支援ネットワーク形成—」

(学会賞選考委員会)

「日本ソーシャルワーク学会 学会賞事業要綱」の一部改正について（提案）

(参考) 1 学会賞の意図と目的

日本ソーシャルワーク学会は、ソーシャルワークの理論研究並びに実践活動の推進を図ることを目的として、本学会の初代会長であった小松源助氏のご寄付を基金の基礎とし、それによるソーシャルワークの研究と実践の一層の発展を図るため、学会員のうちで顕著な研究業績をあげた者の顕彰および若手研究者の研究奨励を目的とする学会賞を設定した。

現 行 条 項	改 正 条 項 (案)
<p>2 学会賞の種類 本学会の学会賞の目的に照らし、以下の賞を設定する。</p> <p>1 学術賞—学会員のうちで顕著な研究業績を上げた者の顕彰 2 学術奨励賞—学会員のうちで研究の発展が期待される若手会員の研究奨励</p>	<p>2 学会賞の種類 本学会の学会賞の目的に照らし、以下の賞を設定する。</p> <p>1 <u>学会賞（本賞）—学会員のうちで研究あるいは実践への貢献が顕著な研究業績をあげた者の顕彰</u> 2 <u>学会賞（奨励賞：著書部門）—学会員のうちで研究の発展あるいは実践への貢献が期待される会員の研究奨励</u> 3 <u>学会賞（奨励賞：論文部門）—学会員のうちで研究の発展あるいは実践への貢献が期待される会員の研究奨励</u></p>
<p>3 審査の対象 各年度の審査にあたり、その前年（暦年）に公刊された学会員によるソーシャルワーク領域の研究業績を対象とする。 学術賞については著書（原則、単著）を対象とする。学術奨励賞については著書と論文（いずれも単著、共著を問わない）に分けて審査する。なお、論文は『ソーシャルワーク学会誌』に掲載されたものを対象とする。</p>	<p>3 審査の対象 各年度の審査にあたり、その前年（暦年）に公刊された学会員によるソーシャルワーク領域の著書（原則、単著）を対象とする。ただし、学会賞（奨励賞：論文部門）については『ソーシャルワーク学会誌』に掲載されたものを対象とし、単著、共著を問わない。</p>
<p>9 附則 この要綱は2013年10月1日より施行する。 この要綱改正案は2018年2月25日より施行する。</p>	<p>9 付則 この要綱は2013年10月1日より施行する。 この要綱改正案は2018年2月25日より施行する。 この要綱改正案は2025年11月30日より施行する。</p>

○研究推進第二委員会

1. 2025年度第42回大会

- ・大会実行委員会（関西学院大学）より残金50万円が学会に寄贈された。
- ・参加者は251名であった。

2. 2025年度研究セミナー企画（案）（白川充理事）

2026年3月8日 13時～16時 @明治学院大学

テーマ：(仮)「権利擁護と身元保証」をめぐるソーシャルワーク実践の展開と今後の課題
現在、企画案を作成し準備に取り掛かっている。

3. 2026 年度第 43 回大会

基調講演については、国際委員会との共催である。実行委員会は、日本社会事業大学の本学会メンバー 14 名とする。

基調講演と学会企画シンポジウムについて資料をもとに説明。同時通訳は難しいので逐次通訳と考えている。英語では 40 分話してもらう（通訳込みで 90 分）予定である。旅費等のかかる企画であるので、見積書をお送りさせていただいた。飛行機代については、今後も値上がりの可能性があるが、もし本日中に見積書に了解をいただければ、年内に飛行機を抑えることで費用を抑えたい。それ以外の通訳費等は、学会の参加費で賄いたいと思っている。

学会企画シンポジウムは作成した趣旨文に基づいて進めていきたい。

4. 2027 年度第 44 回大会

候補大学に依頼中

5. 多様性と文化的コンピテンス研究会 書籍について

多様性研究会が中心となって検討を進めてきた。児童と高齢分野でやや外国ルーツに偏っているという指摘もあり、話題を広げることとした。社会的養護における性的マイノリティの問題を新たに加えたことで少し遅れている。タイトルも変更を予定しているが、研究会全体に諮る予定。最終案ができたら皆様にお伝えしたいと思っている。学会としても取り組みをアピールできる書籍にしたいと思っている。

○研究推進第三委員会

1. 社会貢献推進班

ソーシャルワークコラボ in 愛知 企画案について（川島ゆり子理事）

テーマ「子どもたちの未来を地域で支える包括的支援 —SSW と CSW の協働の可能性—」

開催趣旨 包括的支援体制の構築が進められ、地域で 0 - 100 歳の全世代の暮らしを支える支援が目指されている。しかし、子どもたちの生きづらさは世帯全体の複雑に絡まり合った課題の中で見えづらく、不登校から長期間にわたる引きこもりにつながるケースの増加が懸念されている。

年齢の壁を越え、学校と地域の壁を越え子どもたちの未来を地域で支えることを目指し、SSW（スクールソーシャルワーカー）と CSW（コミュニティソーシャルワーカー）の協働を軸とした包括的支援の可能性を探る。

現在、2月23日の予定で検討中。

2. 出版・教材開発班（佐藤俊一理事）

○実践研究支援ワークショップについて

昨年度までと同様に、3日間で開催している。ただし、これまでの実施を踏まえて、幾つかの点の見直しをしている。そのことがどこまで影響しているか明確ではないが、途中での離脱者がこれまでより減っている。また、新たにファシリテーターとして加わった 2 名が事務局員の役割を果たしてくれることで、事務局体制が整ってきた。また、事前の打ち合わせにおいて、ワークショップの成果として求めるものは、「研究発表」に焦点を当てることを確認している。

1日目	9月23日(火・祝日)	13時～17時	35名参加
2日目	10月26日(日)	13時～17時	30名参加
3日目	11月30日(日)	13時～16時30分	22名参加

※フォローアップ研修は、2026年3月28日16時～19時に決定

○国際委員会

先ほどのヴィラグ先生の説明を受けて了承を得た。メール審議を適宜行い、承認を得ていることを伝えたい。

○研究倫理委員会

多様性の検討について、委員会としても協力していきたい。

○ギース

特になし。

○総務委員会

1. メールマガジン 139号(2025年7月)～143号(2025年11月)の発行、Facebookでの公開
2. ニュースレター 143号の発行
3. 後援名義の依頼他
 - ・日本ソーシャルワーク教育学校連盟より「全国社会福祉教育セミナー2025」の後援依頼
 - ・『ソーシャルワーク学会誌』第45号掲載論文の著者より、転載に関する問い合わせ

Ⅱ. 全国大会シンポジウムについて

1. 経過報告

資料に基づきこの間の経緯説明。課題を検討し、学会として倫理規定やガイドラインはしっかりと考えていく必要がある。当事者の意見も踏まえた検討が必要であることから、ワーキンググループを立ち上げ、今後の対応および規定やガイドラインについて検討をしていく。

関係者へのヒアリングに基づいて検討の上、ガイドラインや倫理規定等を改訂して提案していきたい。大会分科会セミナーでは、開かれた議論の場を設ける予定である。なお、問題が複雑になったのは、大会の責任者が誰なのかがはっきりしていなかったことも一因である。関係者間で互いに課題が共有できていれば、もっと早めに対応できたのではないかと反省している。誰が意思決定して責任を取るのかが明確でない構造的な問題もある。意思決定プロセスを明確にし、本学会のゆるやかなところを残していきながら組織的な体制が構築できればよい。課題があった場合には、第二委員会にすぐ上がってくるなど組織体制について検討していきたい。

2. 研究倫理規程・ガイドライン、大会運営ガイドライン等の改正にむけて

Ⅲ. 役員選挙のスケジュール（以下、役員選挙要領より）

1. 投票期間

オンライン投票 12月5日（金）0時～12月19日（金）24時まで

郵送投票 12月5日（金）～12月19日（金）必着

*オンライン投票の場合は、2025年12月19日（金）24時までに送信された票を有効とします。オンライン投票は投票期間が過ぎるとページにアクセスが不可能となります。郵送投票の場合は、2025年12月19日（金）までに選挙管理委員会に到着したものを有効とします。

2. 開票および選出

(1) 投票期限終了時～2026年1月上旬に選挙管理委員会にて開票を行います。

→ 12月25日（木）11時～開票

(2) 開票の結果、役員選出規程第11条及び第12条により、理事9名・監事1名を選出します。

3. 当選人および推薦理事の公示

当選人および推薦理事の公示については、2026年3月以降に発行のニューズレターおよび本学会ホームページ（<http://www.jsssw.org>）にて行います。

Ⅳ. 会員の動向（2025年6月27日～11月30日）

入会者（6名）

	会員種別	氏名	所属
1	準会員	田場 泰基	立命館大学 大学院 先端総合学術研究科
2	正会員	中野 友香	豊中市自立支援センター
3	正会員	清末 恭平	就労支援「PONO」笠岡センター
4	正会員	梅谷 聡子	花園大学
5	正会員	長岡 若葉	大阪公立大学
6	正会員	福島 令佳	北海道大学 大学院文学研究院文化人類学研究室
7	正会員	朴 蕙彬	同志社大学 社会学部 社会福祉学科

退会者（5名）

Ⅴ. 次回（2025年度第4回）・次々回（2025年度第5回）の理事会日程について

- ・第3回理事会 2025年11月30日（日）17:30～WEB会議（ZOOM）m
- ・第4回正副会長会議 2026年1月11日（日）16:00～WEB会議（ZOOM）
- ・第4回理事会 2026年1月11日（日）18:00～WEB会議（ZOOM）
- ・第5回正副会長会議 2026年2月22日（日）16:00～WEB会議（ZOOM）
- ・第5回理事会 2026年3月8日（日）16:30～研究セミナー後（対面）

IV. 「2025年度第4回理事会」報告

○日時：2026年1月11日（日）18時00分～18時40分 WEB会議（ZOOM）

○出席・欠席者一覧

役職	氏名	所属	出欠
会長	小山 隆	同志社大学	出
副会長	空閑 浩人	同志社大学	出
	和気 純子	東京都立大学	出
	大島 巖	東北福祉大学	出
	保正 友子	日本福祉大学	出
理事	久保 美紀	明治学院大学	出
	岡田 まり	立命館大学	欠
	木村 容子	日本社会事業大学	出
	川島 ゆり子	日本福祉大学	出
	荒井 浩道	駒澤大学	出
	大谷 京子	日本福祉大学	出
	白川 充	仙台白百合女子大学	出
	横山 登志子	札幌学院大学	出
	ヴィラーク・ヴィクトル	日本社会事業大学	出
	志水 幸	北海道医療大学	出
	池田 雅子	北星学園大学	出
	渡辺 裕一	武蔵野大学	委任状
	佐藤 俊一	NPO 法人スピリチュアルケア研究会ちば	出
監事	福山 和女	ルーテル学院大学	出
	黒木 保博	長野大学	出
庶務	小野セレストア摩耶	同志社大学	出

I. 役員選挙結果

今回の選挙では半分交代で、6名+3名。継続理事が9名。今回の選挙で6名。推薦理事3名。6名と1名の幹事を当選とする。推薦理事については、地域分布の考慮したうえで3名を決める。現理事もいる中なので、理事会の後に継続理事10名と当選理事6名、幹事1名で、推薦理事にどなたをお願いするのかを、どの順番に依頼するか含めて決定する。辞退もあるので5名程度と考えている。理事及び正副会長については、正式には7月の総会の決まることになる。正副会長決定については、理事の互選で会長と最大5名まで副会長を決めることになる。

1. 開票結果

2025年12月に実施した役員選挙の結果、次期役員候補者が以下のように決まった。本学会は半数改選制度を採用しているため、今回の選挙で選任された理事と前回の選挙で選任された理事により役員体制を構成する。なお、役割分担は今後実施予定。

○次期役員候補者（敬称略・得票順・同数の場合は五十音順）

区分	氏名	得票数	任期
選挙選任理事	大谷 京子	14	2026年度～2030年度総会終了時
	和気 純子	14	2026年度～2030年度総会終了時
	横山 登志子	13	2026年度～2030年度総会終了時
	大島 巖	10	2026年度～2030年度総会終了時
	木村 容子	8	2026年度～2030年度総会終了時
	小山 隆	8	2026年度～2030年度総会終了時
推薦理事	浅野 貴博	6	2026年度～2030年度総会終了時
	池田 雅子	6	2026年度～2030年度総会終了時
	志水 幸	6	2026年度～2028年度総会終了時 (退任理事の残任期間)
	山野 則子	6	2026年度～2030年度総会終了時
非改選の理事	空閑 浩人	10	2024年度～2028年度総会終了時
	保正 友子		2024年度～2028年度総会終了時
	久保 美紀		2024年度～2028年度総会終了時
	岡田 まり		2024年度～2028年度総会終了時
	荒井 浩道		2024年度～2028年度総会終了時
	ヴィラーク・ビクトル		2024年度～2028年度総会終了時
	渡辺 裕一		2024年度～2028年度総会終了時
	佐藤 俊一		2024年度～2028年度総会終了時
選挙選任監事	黒木 保博	10	
非改選の監事	福山 和女		2024年度～2028年度総会終了時

○選挙手順

1. 投票期間

オンライン投票 12月5日（金）0時～12月19日（金）24時まで

郵送投票 12月5日（金）～12月19日（金）必着

*オンライン投票の場合は、2025年12月19日（金）24時までに送信された票が有効。オンライン投票は投票期間が過ぎるとページにアクセスが不可能。郵送投票の場合は、2025年12月19日（金）までに選挙管理委員会に到着したものが有効。

2. 開票および選出

(1) 12月25日（木）11時～開票

(2) 開票の結果、役員選出規程第11条及び第12条により、理事9名・監事1名を選出。

3. 当選人および推薦理事の公示

当選人および推薦理事の公示については、2026年3月以降に発行のニュースレターおよび本学会ホームページ（<http://www.jsssw.org>）にて公開。

II. 全国大会でのシンポジウムについて

1. その後の経過報告

前回の理事会の議論でワーキンググループを設定することとなった。2月くらいには、拡大ワーキングを実施して、議論をしていただき、学会として前向きに、この件を発展させるためにどうしたらいいか、学会を改革するためにどうしたらいいのか、という視点で議論したいと思っている。プライバシーを大切にしながら、いろいろなご意見をいただきたい。来年の大会でも意見交換をするセッションを将来的には設けられたらと思っている。

Ⅲ. 各委員会からの活動報告

○研究推進第一委員会

- ・51号については、まもなくホームページ掲載予定。
- ・52号については、12月締め切りなので、1月に編集委員会を開催予定。
- ・学会賞受賞者については、1月末までなのでその後動いていく。

○研究推進第二委員会

- ・大会校企画シンポジウム「職能団体4団体における戦後80年の歩み」ということで議論したいと思っている。共催依頼をかけながら、各関係者へのご登壇の依頼もお願いするというので、学会長名で依頼することとなっている。1月のメールマガジンに、第1報の案内を掲載した。

1. 2026年度第43回大会『Social Changeと社会正義:戦後80年を経て、どのような社会を目指すのか』

①学会企画シンポジウム（企画書）

「社会を変えるためのソーシャルワーク」

日時：2026年7月11日（土）15:00～17:30（予定）

場所：日本社会事業大学・清瀬キャンパス（東京都清瀬市竹丘3-1-30）

趣旨：戦後80年を経た今日、我々は思い描いた未来に到達できたのであろうか。ソーシャルワークの課題はサッチャリズムやレーガノミクス以降の「新自由主義」のみならず、トマ・ピケティ（2013＝2014）『21世紀の資本』が提示した「 $r > g$ 」の法則により生み出される「格差」、格差に起因する「ポピュリズム」、ポピュリズムにより生み出された「政治状況」は、世の東西を問わず我々が遵守するソーシャルワークのグローバル定義とは異なる状況が展開されていると言って過言ではない。

具体的には、先に述べた政治的状況が生み出す「分断」は、制度的な社会福祉を含む社会保障の基盤である「社会連帯」や、ソーシャルワークの今日的展開としての「支え合い」にとって、非常に憂慮すべき状況という意味では、現代社会は「反社会福祉」及び「反ソーシャルワーク的」状況にあると言える。

そこで、この学会企画シンポジウムでは、その時代認識に立ったわれわれは、改めてどのような社会を目指すのか、Social Changeと社会正義の今日的展開について、ソーシャルアクション、教育・養成、調査研究の観点から問い直してみたい。

報告（五十音順）

稲葉 剛（一社 つくろい東京ファンド 代表）

「社会を変えるためのソーシャルアクション（仮）」

高良 麻子（法政大学教授）

「社会を変えるためのソーシャルワーク調査研究（仮）」

横山 北斗（NPO 法人 Social Change Agency 代表）

「社会を変えるためのソーシャルワーク教育・養成の課題と期待（仮）」

ディスカッション

モデレーター 大島 巖（当学会副会長、東北福祉大学副学長・教授）

司会 志水 幸（当学会理事、北海道医療大学教授）

コーディネーター ヴィラーグ ヴィクトル（当学会理事、日本社会事業大学准教授）

【事前準備スケジュール】

- ・2月中： 第1回オンライン打ち合わせ（イメージ形成、各報告の方向性の確認）
- ・GW明け：報告資料の共有
- ・5月中： 第2回オンライン打ち合わせ（各報告の内容の確認、論点の検討）

②特別国際企画・基調講演

Looking forward, looking back: justice, empowerment and co-production in social work

「未来と過去を見つめる：ソーシャルワークにおける正義、エンパワメントと共同創造」

日時：2026年7月11日（土）12：15～14：45（予定）

場所：日本社会事業大学・清瀬キャンパス（東京都清瀬市竹丘3-1-30）

趣旨：（自動翻訳）ソーシャルワークの思考の流れは過去80年間で変化してきた。実践は心理的・社会的関係からソーシャルネットワークへの焦点へと移行した。将来、ソーシャルメディアの発展と人工知能の能力は、複雑な対人関係とソーシャルネットワークを重視する方向にソーシャルワークのバランスを再調整する可能性がある。地域関係や共有されたアイデンティティを通じたコミュニティや家族の結束は、より拡散し対立的になる可能性があり、社会的つながりは複雑な形で構築・強化されるだろう。共有された文化的・社会的システムを通じた権威の維持への関心は、競合する優先事項やアイデンティティに取って代わられるかもしれない。個々のソーシャルワークのクライアントに対する自己決定と自己主導への歴史的取り組みは、権力の乱用による不正への懸念によって挑戦を受けてきた。しかし、エンパワメントの概念は、個人的・社会的なアイデンティティの断片化、競合する社会的利益、そしてソーシャルワーク支援における個人の介入・研究・サービス開発の共同創造を通じた権利・利益の新たな関わり方によって、今度は新たな挑戦に直面している。

プログラム

- 12：15～12：20 趣旨説明（日本語のみ、講師紹介程度？）：ヴィラグ ヴィクトル（5分）
- 12：20～13：50 基調講演：Malcom Payne 先生（通訳込み90分）
- 13：50～14：05 コメント：小原 眞知子（通訳込み15分）
- 14：05～14：15 レスポンス：Malcom Payne 先生（通訳込み10分）
- 14：15～14：35 質疑応答：Virag モデレート（コメント中に受け付けた質問から選択）（通訳込み20分）
- 14：35～14：45 閉会：和気 純子（通訳込み10分）

○研究推進第三委員会

- ・ソーシャルワークコラボは、2月23日に開催予定で、現在、広報中。最終打ち合わせの日程調整をする予定。
- ・研究セミナーについては、次年度の企画を考えているところである。

○国際委員会

- ・研究推進第二委員会の報告に同じ。

○研究倫理委員会

- ・特になし

○ギース

- ・9月13日に第9期（10月～）が始まった。ハラスメントの案件について質問がでた。日本教育社会学会は、ハラスメント事案に当たった場合には、活動を制限するような規定を設けているということが出た。日本倫理学会においてガイドラインが細かく示されたという情報提供があった。

○総務委員会

1. メールマガジン

- ・144号（2025年12月）～145号（2026年1月）の発行、Facebookでの公開

2. ニュースレター

- ・定期的に発行予定。

Ⅳ. 会員の動向（2025年12月1日～2026年1月7日）

入会者（3名）

	会員種別	氏名	所属
1	正会員	上田 大介	いわてリハビリテーションセンター
2	正会員	李 錚	東京福祉大学大学院 社会福祉研究科後期課程
3	正会員	韓 品一	東京福祉大学大学院 社会福祉研究科後期課程

退会者（3名）

Ⅴ. 次回（2025年度第5回）の理事会日程について

- ・第4回正副会長会議 2026年1月11日（日）16：00～ 選挙結果 WEB会議（ZOOM）
- ・第4回理事会 2026年1月11日（日）18：00～ 選挙結果 WEB会議（ZOOM）
- ・第5回正副会長会議 2026年2月22日（日）16：00～ 役割分担 WEB会議（ZOOM）
- ・第5回理事会 2026年3月8日（日）16：30～ 研究セミナー後（対面）

V. 「2025年度第5回理事会」報告

○日時：2026年3月8日（日）16時30分～18時10分

○会場：明治学院大学白金キャンパス社会学部附属研究所にて対面開催（一部WEB会議（ZOOM））

○出席・欠席者一覧

役職	氏名	所属	出欠
会長	小山 隆	同志社大学	出
副会長	空閑 浩人	同志社大学	出
	和気 純子	東京都立大学	出
	大島 巖	東北福祉大学	出
	保正 友子	日本福祉大学	出
理事	久保 美紀	明治学院大学	出
	岡田 まり	立命館大学	出
	木村 容子	日本社会事業大学	出
	川島 ゆり子	日本福祉大学	委任状
	荒井 浩道	駒澤大学	出
	大谷 京子	日本福祉大学	出
	白川 充	仙台白百合女子大学	委任状
	横山 登志子	札幌学院大学	出
	ヴィラーグ・ヴィクトル	日本社会事業大学	出
	志水 幸	北海道医療大学	出
	池田 雅子	北星学園大学	出
	渡辺 裕一	武蔵野大学	出
	佐藤 俊一	NPO 法人スピリチュアルケア研究会ちば	委任状
	監事	福山 和女	ルーテル学院大学
黒木 保博		長野大学	委任状
庶務	小野セレストア摩耶	同志社大学	委任状

※次期役員 浅野貴博氏（出席）、山野則子氏（欠席）

I. 次年度体制案

役割分担案を検討した。今後、総会にて承認を得る。

II. 全国大会でのシンポジウムについて

2025年10月にワーキンググループを立ち上げ、提言内容を検討中である。今後、当事者の方も含めて意見をもらい、拡大ワーキンググループでまとめた後に、次回の理事会で提案したい。

直接の関係者、実行委員会、理事関係者等のヒアリング、事実確認を踏まえて検討プロセスそのものを検証していくことで、何が問題だったのかを明らかにしたいと考えている。そして、誰もが安全に発言して学会運営できるように、どのような取り組みが必要なのかという理事会への提言をまとめるのが目的である。

III. 各委員会からの活動報告

○研究推進第一委員会

1. 学会誌編集委員会

- ・学会誌 51号（2025年12月）発行済み
⇒論文2本、グッドプラクティショナー（GP）1本、書評1本掲載
- ・学会誌 52号（2026年6月）編集状況
⇒投稿6本（論文6）現在査読中

グッドプラクティショナー（GP）、書評も掲載予定

2. 学会賞選考委員会

2件の推薦があった。それらも含めて会員の著書をリストアップしている。

3月中に選考開始、4月中に学会賞候補を確定、2026年度第1回理事会で審議予定

3. 研究奨励委員会

2026年度の「会員研究奨励費」の募集のお知らせをメールマガジン等で周知する。締め切りは2026年5月末とし、2026年度第2回（大会前）の理事会で審議予定

○研究推進第二委員会

1. 研究セミナーについて

本日の研究セミナーには、Zoomと対面をあわせて計200名程の参加者がいた。申込者の8割が現場のソーシャルワーカーであった。

2. 2026年度第43回大会

来年度の大会につきまして、着々と準備を進めている。参加申し込みや発表演題募集は4月からを予定している。なお、開催日はベルーナドーム（西武ドーム）にてイベントが開催される関係で周辺のホテルの予約が極めて取りにくくなっているため、参加を予定者は早めにホテルのご予約をされることを推奨したい。

〔日程・場所〕

2026年7月11日（土）～12日（日） 日本社会事業大学・清瀬キャンパス

〔大会テーマ〕

Social Change と社会正義：戦後80年を経て、どのような社会を目指すのか

大会長：小原真知子（当学会員，日本社会事業大学 教授）

〔大会プログラム〕

○1日目

12：00～12：15 開会式

12：15～14：45 特別国際企画・基調講演（逐次通訳付き）

「未来と過去を見つめる：ソーシャルワークにおける正義、エンパワメントと共同創造」

登壇者： マルコーム・ペイン（Malcolm Payne）氏

（マンチェスター・メトロポリタン大学 名誉教授）

コメンテーター：小原 真知子 氏（当学会員，日本社会事業大学 教授）

モデレーター： ヴィラーグ ヴィクトル 氏（当学会理事，日本社会事業大学 准教授）

15：00～17：30 学会企画シンポジウム「社会を変えるためのソーシャルワーク」

報告者（五十音順）：

・稲葉 剛 氏（一社 つくろい東京ファンド 代表）

「社会を変えるためのソーシャルアクション（仮）」

・高良 麻子 氏（法政大学 教授）

「社会を変えるためのソーシャルワーク調査研究（仮）」

・横山 北斗 氏（NPO 法人 Social Change Agency 代表）

「社会を変えるためのソーシャルワーク教育・養成の課題と期待（仮）」

モデレーター 大島 巖 氏（当学会副会長，東北福祉大学 副学長・教授）

司 会 志水 幸 氏（当学会理事，北海道医療大学 教授）

コーディネーター ヴィラーク ヴィクトル 氏（当学会理事，日本社会事業大学 准教授）

17：45～19:15 情報交換会

○2日目

9：00～11：00 自由研究発表

11：10～12：00 ポスター報告（研究報告・実践報告）・展示ブース

12：15～13：30 総会・学会賞授賞式

13：40～16：10 大会校企画シンポジウム「職能4団体における研究と実践の歩み」（企画中）

登壇団体：

- ・公益社団法人 日本社会福祉士会
- ・公益社団法人 日本精神保健福祉士協会
- ・公益社団法人 日本医療ソーシャルワーカー協会
- ・特定非営利活動法人 日本ソーシャルワーカー協会

コメンテーター：小山 隆 氏（当学会会長，同志社大学 教授）

モデレーター：木村 容子 氏（当学会理事，日本社会事業大学 教授）

16：20～16：30 閉会式

〔共催〕

公益社団法人 日本社会福祉士会，公益社団法人 日本精神保健福祉士協会，公益社団法人 日本医療ソーシャルワーカー協会，特定非営利活動法人 日本ソーシャルワーカー協会

3. 2027年度第44回大会について

- ・第44回大会担当の大学に打診して調整中である。

4. 日本ソーシャルワーク学会 研究倫理規程等の改定原案

研究倫理規定案が提案され、検討を行った。次回の理事会で確認する予定。

○研究推進第三委員会

1. 社会貢献推進班

1) 「ソーシャルワークコラボ in 愛知」の開催について（主担当：川島ゆり子理事）

テーマ「子どもたちの未来を地域で支える包括的支援 —SSW と CSW の協働の可能性—」

日 時：2月23日（月・祝）13：30～16：30

開催場所：日本福祉大学東海キャンパス

開催方法：対面参加・Zoom 配信のハイブリッド形式

コラボ先：愛知県社会福祉協議会

あいち SSW 実践研究会 これからのちいき共生社会研究会

（上記2つの研究会は、愛知県下において実践者主体で組織化されている実践研究会組織）

当日は会場参加45名 オンライン参加98名 計143名が参加。

基調講演の奥村賢一会員（福岡県立大）に続き、愛知県一宮市のSSW・CSW がともに一つのケースを

軸に展開した実践報告が行われた。その後、川島理事がコーディネーターとなり、野尻紀恵会員（日本福祉大）、加藤昭宏会員（同朋大学）ほか4名によるパネルディスカッションが行われ、SSWとCSWが協働した包括的支援の可能性を議論した。

2) 次年度「ソーシャルワークコラボ2026 in 山梨」の企画（主担当：渡辺裕一理事）

テーマ案：ソーシャルワーク×中間支援組織

～メゾ・マクロレベルのソーシャルワークの視点からこれからの中間支援を考える（仮案）

コラボ先：山梨県ボランティア協会

2. 出版・教材開発班

1) 実践研究支援ワークショップ（責任者：佐藤俊一理事）

昨年度までと同様に、3日間で開催した。これまでの実施を踏まえて、幾つかの点の見直をしている。そのことがどこまで影響しているか明確ではないが、途中での離脱者がこれまでより減っている。また、新たにファシリテーターとして加わった2名が事務局員の役割を果たしてくれることで、事務局体制が整ってきた。

○国際委員会

昨年度は大会に海外ゲストを招聘したので、今年度は少し大きな企画はできないので、共催程度で始めたけれど、そのなかでソ教連の国際委員会と何か共催できればと話が進んだ。しかし、ソ教連の国際委員会委員長が決まらず、それを待っている間で次年度に向けてまた海外ゲストの話が出てきた。最初はオンデマンド企画で何人かの先生に登壇してもらい、字幕を付けるため予算的には大きめの企画だった。次年度はマルコム・ペイン先生に来ていただけることになったので、今年度は次年度の大きめの企画の準備期間となった。

○研究倫理委員会

・特になし。

○ギース

- ・2月28日にシンポジウムが開催され、ニュースレターで案内した。
- ・3月22日に運営委員会が開催される予定である。

○総務委員会

1. メールマガジン

- ・146号（2026年2月）～147号（2026年3月）の発行、Facebookでの公開

2. ニュースレター

- ・今後発行予定。

Ⅳ. 会員の動向（2026年1月8日～2026年3月3日）

2026年3月3日現在

入会者（5名）

	会員種別	氏名	所属
1	正会員	鈴木 綾子	名古屋市守山区社会福祉協議会
2	正会員	久村 和穂	金沢医科大学 医学部公衆衛生学
3	正会員	増田 裕子	昭和女子大学 人間社会学部 社会学科
4	正会員	坂本 智謙	特定非営利活動法人愛岐福祉会
5	正会員	高井 逸史	大阪経済大学 人間科学部

退会者（13名）

Ⅴ. 次回（2026年度第1回）の理事会日程について

- ・ 第1回正副会長会議 2026年4月12日（日）16：00～
- ・ 第2回正副会長会議 2026年5月17日（日）17：00～
- ・ 第3回正副会長会議 2026年6月21日（日）16：00～
- ・ 第1回理事会 2026年5月24日（日）18：00～ 学会賞の推薦・授与の検討、ワーキングの報告
- ・ 第2回理事会 2026年6月28日（日）16：00～ 総会資料の確認・予算決算

VI. 日本ソーシャルワーク学会 2026 年度「第 43 回大会」 のお知らせ

2026 年度 日本ソーシャルワーク学会第 43 回大会のご案内（第 3 報）

大会 HP を開設いたしました。学会 HP にアクセスください。ご参加のお申し込み及び自由研究発表（口頭発表）・ポスター報告（研究報告・実践報告）の演題募集は 4 月 1 日からです。奮ってご参加ください！

〔日程・場所〕（対面開催）

2026 年 7 月 11 日（土）～ 12 日（日） 日本社会事業大学・竹丘キャンパス

〔大会テーマ〕

Social Change と社会正義：戦後 80 年を経て、どのような社会を目指すのか

大会長：小原眞知子（当学会員，日本社会事業大学 教授）

〔趣旨〕

日本社会事業大学が創設 80 周年を迎えるこの節目の年に、本学キャンパスにおいて日本ソーシャルワーク学会第 43 回大会を開催できますことを、大変意義深く、心より嬉しく思っております。本大会では、「Social Change と社会正義—戦後 80 年を経て、どのような社会を目指すのか—」を大会テーマとして掲げました。

戦後 80 年を迎えた今日、格差拡大やポピュリズム、社会の分断など社会基盤を揺るがす課題が顕在化しています。これらは社会連帯のあり方とソーシャルワークの価値・役割を問い直し、社会変革と社会正義に向けた理論と実践の再構築を私たちに迫っています。

本大会では、マルコム・ペイン（Malcolm Payne）氏（マンチェスター・メトロポリタン大学 名誉教授）を基調講演にお迎えし、過去 80 年間のソーシャルワーク思想の変遷を踏まえ、実践の焦点が心理社会的関係からソーシャルネットワークへと広がってきた過程を整理し、ソーシャルメディアや人工知能の発展が今後の実践や社会的つながりに与える影響を展望します。あわせて、学会企画シンポジウムではソーシャルアクション、教育・養成、調査研究の視点からこれからの社会のあり方を多角的に検討し、大会校企画シンポジウムでは職能 4 団体の歩みを振り返りながら、研究と実践の結節点を探ります。困難な時代にソーシャルワークがどのように応答してきたのかを共有し、今後の展望を考えます。

本大会が、分断を乗り越え、人びとの支え合いと連帯を再生するための知的対話と協働の場となることを心より願っております。

〔大会プログラム〕

1 日目

12：00～12：15 開会式

12：15～14：45 特別国際企画・基調講演（逐次通訳付き）

「未来と過去を見つめる：ソーシャルワークにおける正義、エンパワメントと共同創造」

登壇者： マルコム・ペイン（Malcolm Payne）氏

（マンチェスター・メトロポリタン大学 名誉教授）

コメンテーター：小原 眞知子 氏（当学会員，日本社会事業大学 教授）

モデレーター： ヴィラーク ヴィクトル 氏（当学会理事，日本社会事業大学 准教授）

15：00～17：30 学会企画シンポジウム

「社会を変えるためのソーシャルワーク

～反ソーシャルワーク的な社会状況において実践・教育・研究に何ができるか～」

報告者（発表順）：

・稲葉 剛 氏（一社 つくろい東京ファンド 代表、認定NPO 法人 ビッグイシュー日本 共同代表）

「排除と貧困に抗うソーシャルアクション」

・横山 北斗 氏（NPO 法人 Social Change Agency 代表）

「社会を変えるためのソーシャルワーク教育・養成の課題と期待」

・高良 麻子 氏（法政大学 教授）

「社会を変えるためのソーシャルワーク調査研究」

司 会： 志水 幸 氏（当学会理事，北海道医療大学 教授）

モデレーター： 大島 巖 氏（当学会副会長，東北福祉大学 副学長・教授）

コーディネーター：ヴィラーク ヴィクトル 氏（当学会理事，日本社会事業大学 准教授）

17：45～19:15 情報交換会

2日目

9：00～11：00 自由研究発表

11：00～12：00 ポスター報告（研究報告・実践報告）

12：15～13：30 総会・学会賞授賞式

13：40～16：10 大会校企画シンポジウム「職能4団体における研究と実践の歩み」

登壇団体：

・公益社団法人 日本社会福祉士会 山下 康 氏（会長）

・公益社団法人 日本精神保健福祉士協会 古屋 龍太 氏（相談役）

・公益社団法人 日本医療ソーシャルワーカー協会 野田 智子 氏（副会長）

・特定非営利活動法人 日本ソーシャルワーカー協会 保良 昌徳 氏（会長）

コメンテーター：空閑 浩人 氏（当学会副会長、同志社大学 教授）

小山 隆 氏（当学会会長、同志社大学 教授）

モデレーター： 木村 容子 氏（当学会理事、日本社会事業大学 教授）

16：20～16：30 閉会式

○基調講演：マルコーム・ペイン（Malcolm Payne）氏のご紹介



マンチェスター・メトロポリタン大学名誉教授、キングストン大学（ロンドン）名誉教授。以前、ロンドンの聖クリストファー・ホスピスにて社会心理的スピリチュアルケア部門の統括の他、各種のソーシャルワーク実践に従事。

近年の著書は『An A-Z of social work theory』（Sage, 2021）、『How to use social work theory in practice』（Policy Press, 2020）、『Modern Social Work Theory（第5版）』（Bloomsbury, 2021）、『Why social work is important』（Policy Press, 2024）など。

日本では『地域福祉とケアマネジメント：ソーシャルワーカーの新しい役割』（筒井書房, 1998）と『ソーシャルワークの専門性とは何か』（ゆみる出版, 2019）という訳書が出版。

〔大会・情報交換会参加費〕

会員（含共催団体の会員）	7,000 円
非会員	8,000 円
学生・院生	3,000 円
高校生	1,000 円
情報交換会	5,000 円

〔参加申し込み〕

- ・参加申込期間は、2026年4月1日（水）～7月7日（火）正午までです。
- ・大会ホームページ内に Peatix のサイトへのリンクがあります。

<https://jsssw43taikai.peatix.com/>

〔自由研究発表・ポスター報告の演題募集〕

- ・演題の応募については、大会ホームページをご覧ください。
- ・応募受付期間は、4月1日～5月15日（金）です。
- ・大会ホームページ内「8. 自由研究発表（口頭発表）演題募集」及び「9. ポスター報告（研究報告・実践報告）演題募集」に応募要件や留意事項、所定の様式と、提出先 URL（Google フォーム）が掲載されています。

〔情報保障および合理的配慮について〕

基調講演、学会企画、大会校企画、総会において手話通訳が必要な方がいる場合には、手配を予定しております。必要な方は6月17日（水）までに大会事務局へご連絡ください。また、その他個別に配慮が必要な場合は、大会事務局までお問い合わせください。

〔実行体制〕

主 催： 日本ソーシャルワーク学会 第43回大会実行委員会

大会長： 小原真知子（日本社会事業大学）

実行委員長：木村容子（日本社会事業大学）

事務局： 新藤健太（日本社会事業大学）・大部令絵（日本社会事業大学）

共催団体：

公益社団法人 日本社会福祉士会、公益社団法人 日本精神保健福祉士協会、公益社団法人 日本医療ソーシャルワーカー協会、特定非営利活動法人 日本ソーシャルワーカー協会

後援団体（予定）：

一般社団法人 日本ソーシャルワーク教育学校連盟、公益社団法人 東京社会福祉士会、一般社団法人 東京精神保健福祉士協会、一般社団法人 東京都医療ソーシャルワーカー協会、社会福祉法人 東京都社会福祉協議会、清瀬市、社会福祉法人 清瀬市社会福祉協議会

Ⅶ. 新入会員の声

ソーシャルワークの担い手と拓かれた実践への探究

立命館大学大学院 先端総合学術研究科 博士前期課程修了 田場 太基

私は、障害学とソーシャルワークの視点から障害者運動の研究を続けてきました。修士論文では大分県別府市を事例に地域の市民運動と自立生活運動との相互作用を分析し、障害者運動は市民運動を含む地域の多様なアクターとの信頼関係をベースに当事者の発言権を拡張してきたプロセスを明らかにしました。

また研究の傍ら、私は支援者として療育の現場で、解を急ぐことなく双方向の対話を通じて主体的な姿勢を支える実践を行ってきました。こうした往還のなか、ソーシャルワークに内在する権力性と向き合う方法としての省察的実践の意義を実感する一方、私自身の生活にある脳性麻痺という属性のもとでいかにソーシャルワーカーとなりえるのかとの問題意識が強まるようになりました。

なぜなら私は、「右ポケットに手を突っ込めば身障者だとバレない程度の障害をもつひとり」と思い込んできたからです。しかし自己覚知を伴う場面に直面したとき、日頃から障害の開示を拒む自分とのコンフリクトが生じ、ソーシャルワークの専門職像とのギャップを痛感しています。

これらの経験から、誰がソーシャルワークを担うのか (from Whom?)、次に、なぜソーシャルワークをする必要があるのか (Why?) を探究し、これまで取り残されてきた課題に取り組んでいこうと思います。どうぞ宜しくお願いいたします。

入会にあたって

中野社会福祉士事務所 中野 友香

このたび、入会させていただきました中野友香と申します。障害福祉に29年ほど従事し、成年後見活動に18年ほど従事しております。私の「障害福祉」の目覚めは、ベクトル・ニイリエ氏のノーマライゼーションの講演でした。あの日に感じたことが今も心に残っています。今後も障害者の地域生活に関わっていきたくと考えています。

相談支援に従事して、複数の課題解決が必要な家族や個人を支援した際に、社会学やソーシャルワークを意識して取り組むと、支援が流れていく経験をしました。実践はエビデンスに基づいて行い、実践にあるものを言葉にできるようになりたいと思い、同志社大学大学院前期課程で学んだところです。今後も現場から学び、ソーシャルワークの習得に努めてまいります。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

ソーシャルワークでなにを描きだすか。

清末 恭平

この度、本学会に入会させていただきました清末（きよすえ）と申します。

芸術大学卒業後、フリーターなど紆余曲折しつつ、地域生活センターで主に精神障害をお持ちの方々の支援を行ってまいりました。直近では、若年層向け就労相談窓口や生活訓練事業所の施設長を勤めながら現場での実践を通して、職員・施設・法人のマネジメントについての構造解析と類型化を深めております。その中で、職員がどのように対人援助技術を成長させていけるかに焦点を定め、実践における“あの感じ”“この

感じ”に見られる価値・倫理の理論の深淵をのぞき込んでいると、宙を手でつかむような虚構と暗闇の中には、“福祉の（における）哲学”がひっそりと顔を背けていることに気づかされた今日この頃です。「ソーシャルワークにおける“感覚の論理”」というのが最もホットな関心ごとです。私事ですが、最近では趣味の絵画も再開し、対人援助への共通点をよく発見いたします。当事者⇔職員⇔施設⇔法人…⇔社会のズームイン・アウト、あるいは冷凍と解凍を繰り返す（？）など、多彩な“感覚”を受け取っている所でございます。学会活動にて多くの諸先生方からの学びや自己研鑽を行いながら、未来のソーシャルワークを描き出す一筆を走らせて参りたいと存じます。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

入会のご挨拶

花園大学 梅谷 聡子

この度、貴学会に入会させていただきました梅谷聡子と申します。児童養護施設の児童指導員やスクールソーシャルワーカーとして実践に携わってきた経験から、子どもに関わるソーシャルワークに関心を持っています。花園大学では、「児童・家庭ソーシャルワーク」や「ソーシャルワーク実習」などの授業を担当しています。研究においては、これまで、主に児童養護施設における自立支援をテーマに取り組んできました。施設に入所する子ども達が自立に向かう過程においては、日々のケアワークに加え、ソーシャルワークの視点からの実践がより重要であると考え、その方法論を構築することを目指しています。現在は、特に社会的養護の自立支援におけるアセスメントに焦点を当てた研究を進めています。今後は、会員の皆様から多くを学びつつ研究を深化させるとともに、学会活動に積極的に参画し、貴学会の発展に微力ながら貢献できますよう精一杯努めてまいります。未熟者ではございますが、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

入会にあたって

大阪公立大学（博士後期課程） 長岡 若葉

このたび、日本ソーシャルワーク学会に入会いたしました、長岡 若葉と申します。

大学卒業後、医療ソーシャルワーカーの経験を経て、現在は大阪公立大学 現代システム科学研究科 社会福祉学分野（博士後期課程）に在籍しております。

主に、児童虐待等のACE（児童期の逆境体験）を経験したものの児童期に十分な支援を受ける機会が得られなかった若者の、成人後の困難や支援に関する研究を行っています。

研究を進める中で、困っており何らかの手助けや関わりは求めているが「支援」までは求めている者、ソーシャルワーカーは自認していないが社会福祉分野以外で豊かな関わりをする支援者などの事例に触れることがあり、そのたびにソーシャルワークとは何か、社会福祉とは何かを考えさせられる日々です。学際的な研究が求められる昨今であるからこそ、自身の依拠する専門性とは何かを理解することの重要性を痛感しています。

今後ともご指導ご鞭撻の程どうぞよろしく願いいたします。

ソーシャルワーク演習と演劇

北海道大学大学院文学研究院文化人類学研究室／専門研究員 **福島 令佳**

この度は、入会させて頂きまして、ありがとうございます。私は、児童福祉施設のソーシャルワーカーを経て、現在、福祉現場のエスノグラフィー研究をしながら、非常勤講師をしております。ソーシャルワーク教育では、基盤と専門職や演習や等を担当しています。また、経済学部、文学部や看護、保育などの異分野の学生達に、福祉人類学や憲法を教えています。

現在の研究テーマは演劇手法を取り入れたソーシャルワーク演習です。既に授業に演出家を招いて、実践中です。

また、今後さらに発展させる為にも、参与観察として、3月に『マクベス』で舞台に立ちます。こうした取り組みを、学会を通じて発信し、共感する皆さまにご教授頂きながら、シェア出来ればと思います。どうぞ宜しくお願い致します。授業やフィールドワークの様子は、インスタグラム @reika_fukushima をご覧下さい。どうぞ宜しくお願い致します。

入会にあたって

同志社大学社会学部社会福祉学科 **朴 蕙彬 (パク ヘビン)**

この度、日本ソーシャルワーク学会に入会しました朴蕙彬と申します。私の研究関心は、「年齢にとらわれることなく、誰もが自分らしさを失わずに生きられる社会の実現」にあります。その背景には、人生の各段階において年齢によって人の可能性や役割が規定されてしまう社会構造への問題意識があります。そこで私は、ライフコース全体に作用する年齢に対する偏見や差別である「エイジズム (Ageism)」を克服すべき課題として捉え、研究および実践活動に取り組んでおります。

これまで、社会文化の中に内在するエイジズムを可視化する試みとして、日本映画に描かれる高齢者像や世代間関係を分析し、高齢者ステレオタイプがいかに形成されているかを明らかにしてきました。あわせて、エイジズム克服に向けた具体的な介入として、ソーシャルワーク教育における教育モデルの検討や、多世代交流を取り入れた実践活動にも取り組んでいます。異なる世代が出会い、相互に関わる経験は、年齢に基づく固定的な理解を問い直し、ライフコースを横断した相互理解を促す重要な契機になると考えています。

本学会においては、ソーシャルワークの視点からエイジズムをどのように捉え、教育や実践の中でいかに克服していくことが可能かについて探求していきたいと考えております。学会員の諸先生方からご指導・ご助言を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

編 集 後 記

日本ソーシャルワーク学会通信（ニューズレター）第144号をお届けします。寒暖差の激しかった3月が終わり、あっという間に新年度が始まりました。みなさま、お忙しくされていることと存じます。

第144号は、巻頭言「実践家が活用すべき有効な「実践研究方法」の探索」、「ソーシャルワーク・コラボセミナー2025」報告、役員選挙結果も含めた第3回から第5回理事会報告、第43回大会のプログラムのご案内と盛りだくさんの内容となりました。また、今回は7名の「新入会員の声」を掲載することができました。新入会員の方々の本学会への熱い思いを感じ、大いに刺激をいただきました。ありがとうございました。

7月11・12日に開催されます第43回大会は、日本社会事業大学にて開催されます。他のイベントと重なっており、ホテルが大変込み合っております。みなさま、お早めにホテルをご予約いただき、ぜひご参加いただけましたらと存じます。多くの皆様のご参加をお待ちしております。

同志社大学 小野セレストア摩耶
(庶務担当理事・総務委員会)

【日本ソーシャルワーク学会事務局】

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂4-1-1 オザワビル 2F (株) ワールドプランニング内

TEL：03-5206-7431 FAX：03-5206-7757

E-mail：jsssw@worldpl.co.jp <http://www.jsssw.org>

